

## C-56 明治・大正時代の宮廷を中心とする女子礼服の被服構成 (第2報)

昭憲皇太后御大礼服について、県立米沢女短大 原のぶ子 ○徳永幾久

目的 第1報で報告のとおり、日本洋装史上特異な時期である1900年から1930年までに30年間に着用された大礼服4着を含む11着の礼服資料が一連の形でみられる原コレクションについての研究的意義は大きい。それらは当時のモードの骨組を知るだけでなく被服構成上も貴重ではあるが、更に当時の日本が皇室を中心とした国威の高揚と欧米政策に心を配った時期でもあり、それらを背景として儀礼用に着用されたその資料は当時の社会状況を察知する上にも意義があると思われる。そこで本報は明治のその時代が最もよく表現されている昭憲皇太后御大礼服を資料として、被服構成・縫製面からの特色を考察する。

方法 実物精査および復元による比較調査、外国文献資料および上杉資料との比較。

結果 ①資料は明治45頃のものと推察され、ドレス(ボデイス・スカート)トレーン、ケー  
プ、ベルト・キヤミソル、パチコート、ドロワースの組合せである。②明治宮廷服のデザイン因子として、国家の象徴を国花で表現し、胸トレーンに百花咲競ふ菊花とケープには蘭花を配置し、構成意図は最も日本的国威表徴にある。身分社会の権威と尊厳性、希望と期待を含む優雅さと格调の高さが要求されるこの大礼服には、それらが惜しみなく配慮されている。③モードはV型袈状胸形、ボーン入立衿、レースのラッフル付ベル袖、曲線カットのスカートなど1905~7の特色をもつSカーブラインのもの、ケープは1890年モードのスペインカットであり、裁断・縫製共に当時の典型的資料であり、最も国威を高くした誇り高い明治期の代表作品と思われる。